

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 7 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370107

研究課題名(和文) 美学=感性学における快と感情

研究課題名(英文) The Pleasure and Emotion in 'Aesthetics=Aesthetica'

研究代表者

西村 清和 (Nishimura, Kiyokazu)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：50108114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：分析哲学における感情の命題的態度論(感情の認知理論および感情の知覚理論)の有効性と限界を見極めた上で、ハイデッガーに代表される感情の現象学との接点をもとめ、それを下に感情の原理論を新たに構築した。また感情の原理論の枠組みの下で、とくに感情と道徳(道徳の情操主義)、共感と利他主義、感情の義務論、アクラシア(意志の弱さ)と自己欺瞞といった、信念や感情にまつわる個々の問題を具体的に論じ、また美的経験や芸術経験と感情の関わりを、美的快、美的感情、美的義務論、美的アクラシア、フィクションと感情移入、悲劇の快のパラドクスといった論点において具体的に論じた。

研究成果の概要(英文)：I made sure of the validity and the limits of the propositional attitude theory of emotion in analytic philosophy. Then I tried to find the connection of Heideggerian phenomenology of emotion with the analytic philosophy of emotion and to lay the foundation for a new theory of emotion. And in the framework of this new theory of emotion I discussed the issues such as moral sentimentalism, sympathy and altruism, the deontology of emotion, akrasia and self-deception as well as aesthetic pleasure and aesthetic emotion, aesthetic deontology, aesthetic akrasia, fiction and empathy.

研究分野：人文学

キーワード：美学 感情 快 芸術 感性学 命題的態度 分析哲学 現象学

### 1. 研究開始当初の背景

近年、伝統的には知・情・意からなるとされる人間の経験や認識の全体のうちで、とりわけ「情」にかかわる原理的な諸問題を主題化し、知覚や感覚、感性や感情などの基本構造を解明する学としての美学=感性学の可能性をさぐる関心と試みがわが国でもとみに高まってきた。だが特に「感情」については、我々の心を構成する知覚や思考、信念や欲求や意志と区別してとくに「感情」(や「気分」)と呼ばれる心的現象ないし心的状態についての原理的分析という点で、これまでの哲学や美学が十分な成果をあげているとは言いがたい。1970年代以降、分析哲学内部においても「心の哲学」の一環として「感情」が、信念の命題的態度論をモデルとした感情の認知理論や知覚絵論という形で盛んに論じられるようになるが、じつはこれら感情の分析哲学には現象学、とりわけハイデッガーの「気分」すなわち「情態性」の現象学が大きな影響を与えている。本研究の学術的な特色・独創性は一方で知覚や感情に関する現象学と、他方で信念や感情に関する分析哲学の命題的態度論の成果を踏まえて、この両者が交差する点に焦点を当てつつ情態性の構造を分析的に析出する事をめざす点にある。感情の哲学として分析的にこの問題に踏みこんだ理論はまだ存在しない。

### 2. 研究の目的

本研究はまずは、英語圏における感情の命題的態度論と大陸の現象学とが交差する点に焦点を当てることで、心の「ホーリズム」の立場から「感情」と呼ばれるものが心の全体的機制の内のどこに、どのように位置づけられるかを探求する。この感情についての体系的な原理論の構築によって初めて美学=感性学が問うべき美的快や美的感情にまつわる諸問題への展望が開ける。美的判断の根拠とされる「快」とは何か、それはそもそも「感情的な質」なのか、悲劇の快の「混合感情」の様にそれは混合される物か、感情の美的表出とそのような表現が効果としてもたらす「美的感情」とは何かといった、美学にとって根幹をなす問題もこの新たな布置の下でより体系的に論じる事が可能となる。更に伝統的な美学では必ずしも主題的に論じられる事なかった美学と倫理学の交叉、美的経験の倫理性に関わる問題群にも「心のホーリズム」の立場から新たなアプローチが可能となる。「君はモーツァルトを是非とも聴くべきであり、それを正しく評価して正しく楽しむべきである」という言い方は日常生活でしばしば聞かれる。これは明らかに美的な規範と美的な義務を主張している。その様に美的価値判断に普遍的な「規範」が関与するならば、それは行為の倫理的規範のように義務として課せられるのか、つまり快や感情も「義務論(deontology)」的に強制さ

れうるのか。伝統的な美学における「よき趣味」は単に個人の美的傾向性のみならず、その人格に関わる倫理的な傾向性を含意してきたが、だとすれば「悪趣味」は美的のみならず倫理的にも悪とされるのか。それとも美的規範を逸脱する傾向性や悪趣味は、なすべき事を理解しその信念をもちながらも欲求や感情に引きずられる倫理的な「意志の弱さ」とおなじ意味で「美的な意志の弱さ」の問題なのか。果たしてキッチュは、自分の見たくないものを見ないようにする認識上の「自己欺瞞」と同様に「美的自己欺瞞」といえるのか。共感や同情の倫理学を主張する哲学者たち(例えばヒューム)はしばしばその事例としてフィクションにおいて経験される共感や同情をあげるが、共感の倫理学は共感の美学と通底するのか。だとすれば、「美しき魂」の18世紀的理想は共感の美学の仮象世界において体得され、それが現実世界における人格の陶冶をもたらすということになるのか。本研究はこれら錯綜した問題群に新たな照明を当ててことを目的とする。

### 3. 研究の方法

まずプラトン、アリストテレスから、現代のハイデッガーにいたる伝統的な哲学・美学における感情論の再検討によって、感情をめぐるさまざまな論点を整理し、感情の哲学の新たな構築のために何が必要なのかを見極める。この準備作業をもとに、これら伝統的な感情論とは逆のアプローチとして、近年の分析哲学における「心の哲学」と「感情の哲学」、とりわけ信念・知識・欲求といった命題的態度をモデルとして感情をも命題的態度のひとつとして扱う命題的態度論の帰趨を見届ける。ソロモンやド・スーザに代表されるこの立場「感情の「認知理論」とも呼ばれる」には三つの問題がある。一つは信念や感情は命題を「対象」とするものかという疑問である。二つ目は、人の心の中の信念や感情という一人称的な心的状態が果たして三人称的で普遍的な命題(that p)によって特定できるのかという疑問である。三つ目は、果たして「感情」が信念や欲求とおなじタイプの心的状態といえるのか、更には信念や欲求にしても、我々の心の中で個別に名指される特定の心的状態なのかである。これらの問題は結局人の「心」とはいかなるものであるかという問題、つまりは「心の哲学」の根本的な問題「知覚、反省、思考、判断、欲求、意志、そして感情の定義と相互関係、一人称特権、経験と言語、合理性」に関わる。本研究は、信念の命題的態度論がかかえる主として三つの問題点をあらためて検討し、それを解決するべくあらたな展望を提示する。そのことは、分析系の「心の哲学」の広範で原理的な問題群に深く立ち入ることが必要である。しかしそうすることではじめて、心のホーリズムの枠組みのなかで、「知覚」に支

えられた「信念」や「知識」そして「欲求」と「感情」とのちがいは何か、またそれらと「感情」がどのような関係に立つのかについて見きわめることが可能となる。そして分析的なアプローチで明らかとなった「感情」の位置づけをもとに、現象学的な「情態性」の概念をあらたな視点で展開することで、分析系の感情の哲学でも、またヨーロッパの感情の現象学でも至りえなかった、めざされるべき情態性の構造論を展開することが可能となるだろう。そのように、知覚や感性の現象学と分析系の「心の哲学」が交叉する地点に焦点を絞り込んで情態性の構造論を構築した上で、その枠組の中で改めて美的な快や感情にまつわる諸問題の再検討を行う。そのつどの研究成果を他の研究者との対話において検証し発展させるべく研究成果は国内外の学会等で発表するとともに、最終的な成果は著書のかたちで公刊する予定である。

#### 4. 研究成果

(1) プラトンやアリストテレス、ゼノンからストア学派の古代感情論、近代のデカルトやヒューム、20世紀に入ってシェラーやハイデッガー、サルトル、ボルノウ、そしてシュミッツやベームらの感情論など、西洋における伝統的な感情論の歴史的展開を、感情の原理論、感情と理性、感情と知覚、感情と信念・認識、感情と道徳、感情と快、感情と芸術、美的感情と美的快といった論点に注目して分析した。

(2) 分析哲学における感情の命題的態度論、いわゆる感情の認知理論とそれに対する批判として出てきた感情の知覚理論を取り上げ、それらの理論の有効性を見極めた。感情の認知理論は、感情の合理性を論じるには有力な方法ではあるが、信念の命題的態度論をモデルとするために、主体がもつ一人称的な感情経験の内実を、信念ないし判断の対象としての三人称的で客観的な命題として扱うことになり、これによって感情にかかわる一人称特権の問題、すなわち主観的な感情経験の内実をどう命題で表現するかという問題をうまく扱えないことをあきらかにした。また、認知理論の問題を克服すべく登場した感情の知覚理論も、やはり信念の命題的態度論をモデルとしているために、認知理論とおなじ難点をもつことをあきらかにした。その成果は論文「感情のトポグラフィー」(『國學院雑誌』第115巻第6号、平成26年6月)としてまとめられた。

(3) 命題的態度論における上記の問題性に対して、分析哲学内部にあって、たとえばD・ルイスのように、信念も命題内容(それが特定する世界)を対象とするのではなく、そのように特定される世界に「自分が住んでいるという信念」従って「自己についての(de se)信念」(「言表についての態度と自己についての態度」, 1983)をもつ事だとする立場もあり、これに従えば三人称的な命題的態度もそ

の根底には非命題的な「自己についての信念」が潜在するというので、その問題点を回避する立場もある。研究代表者は、ルイスとその賛同者の立場は、分析哲学の方向から信念や感情を、ハイデッガー的な気分の現象学における自己了解と情態性のレベルで扱うことの可能性を示唆していることを突き止め、この方向で分析哲学と現象学を橋渡しするあらたな感情の原理論を構築した。

(4) この感情の原理論に基づいて、感情と道徳(道徳の情操理論)、共感と利他主義、感情の義務論、アクラシア(意志の弱さ)と自己欺瞞といった、信念や感情にまつわる個々の問題を具体的に論じ、また美的経験や芸術経験と感情の関わりを、美的快、美的感情、美的義務論、美的アクラシア、フィクションと感情移入、悲劇の快のパラドクスといった論点において具体的に論じた。この後者の問題については論文「芸術と感情」(『國學院雑誌』第118巻第8号、平成29年8月予定)としてまとめた。また、平成29年10月に國學院大學で開催が予定されている第88回美学会全国大会では、研究代表者がコーディネーターとして企画したシンポジウム「芸術と感情」において本研究の成果の一端を提示し、また様々な芸術ジャンルにおける感情の関わりを他のパネリストとともに総合的に論じる予定であるが、これは感情をめぐる研究の今後の活性化に寄与することになるだろう。

(5) 本研究の成果は、感情の体系的な原理論と、それにもとづく美学=感性学における快と感情にかかわる諸問題の解明にあるが、その成果の全体は平成29年度中に、著書『感情の哲学 分析哲学と現象学』(仮題)として、出版の予定である。日本語で書かれたもので、こうした感情の体系的な原理論の著作はあまりなく、この本の出版は、日本における感情の哲学・美学研究の今後の展開に寄与することになるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

西村清和、「芸術と感情」、『國學院雑誌』、査読有、第118巻第8号、2017(予定)

西村清和、「感情のトポグラフィー」、『國學院雑誌』、査読有、第115巻第6号、2014、1-16

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

西村清和 (Kiyokazu NISHIMURA)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：50108114

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )